

教職支援室便り（7月号）

令和2年 7月 10日（金）

文責：教職支援室 曾我文敏

☎0985-20-4808

教員採用試験（第一次試験）始まる

教員採用試験（第一次試験）が始まりました。すでに、北海道や鳥取県では、第一次試験が終わっています。今月11日（土）、12日（日）には、九州各県市で行われます。

昨年10月から勉強会を続けてきましたが、学生の皆さんのほとんどが、誠実に、真摯に、演習に取り組んできました。私も、心から賞賛したいです。そして、「やれるだけのことはやった。」という気持ちをもって、試験に臨んでほしいと思います。これまでの努力は、これからの人生を豊かなものにする信じています。

なお、本学の学生が受験する自治体、受験教科・科目、応募者数、採用予定者数、倍率については、次の通りです。



自治体	受験教科・科目	応募者数	採用予定者数	倍率
宮崎県	小学校	366	205名程度	1.8
	小学校英語	7	5名程度	1.4
	中学校英語	67	10名程度	6.7
	高等学校英語	40	2名程度	20.0
鹿児島県	小学校	621	270名程度	2.3
	中学校英語	66	20名程度	3.3
佐賀県	小学校	304	190名程度	1.6
熊本県	小学校	363	178名程度	2.0
	中学校英語	28	11名程度	2.6
長崎県	中学校英語	36	14名程度	2.6
広島県	中学校英語	882	中学校教諭 300名程度	2.9
東京都	中学校英語	5224	中学校・高等学校教諭 1200名程度	4.4
香川県	中学校英語	401	中学校教諭 85名程度	4.7
愛媛県	中学校英語	未発表	10名程度	未発表
福岡市	小学校	704	285名程度	2.5



教員に求められる資質能力



教員に求められる資質能力については、これまで中央教育審議会等において、時代の要請などを踏まえ論じられてきました。最近では、学習指導要領の改訂に伴い、これからの教員に求められる資質能力（カリキュラム・マネジメント力、主体的・対話的で深い学びを実現するための授業改善力など）が示されています。しかし一方で、教員採用試験の実施要項には、「使命感、情熱、学び続ける力」など、不易とされてきた資質能力が多く見られます。いかに時代が変わろうとも、変えてはいけない資質能力があるということです。現在、先生方には、不易の資質能力と新たな資質能力の両者が求められるなど、教員研修の在り方が問われています。

以下、参考資料として、これまでの中央教育審議会答申を紹介します。

1 平成17年中央教育審議会答申

○ 教職に対する強い情熱

変化の著しい社会や学校、子どもたちに適切に対応するため、常に学び続ける向上心を持つことも大切である。

「教師は授業で勝負する」と言われるように、この力量が「教育のプロ」のプロたる所以である。この力量は、具体的には、子ども理解力、児童・生徒指導力、集団指導の力、学級づくりの力、学習指導・授業作りの力、教材解釈の力などからなるものと言える。

○ 総合的な人間力

教師には、子どもたちの人格形成に関わる者として、豊かな人間性や社会性、常識と教養、礼儀作法をはじめ対人関係能力、コミュニケーション能力などの人格的資質を備えていることが求められる。また、教師は、他の教師や事務職員、栄養職員など、教職員全体と同僚として協力していくことが大切である。

2 平成24年中央教育審議会答申

○ 教職に対する責任感、探究力、教職生活全体を通じて自主的に学び続ける力(使命感や責任感、教育的愛情)

○ 専門職としての高度な知識・技能

・教科や教職に関する高度な専門的知識(グローバル化、情報化、特別支援教育その他の新たな課題に対応できる知識・技能を含む)

・新たな学びを展開できる実践的指導力(基礎的・基本的な知識・技能の習得に加えて思考力・判断力・表現力等を育成するため、知識・技能を活用する学習活動や課題探究型の学習、協働的学びなどをデザインできる指導力)

・教科指導、生徒指導、学級経営等を的確に実践できる力

○ 総合的な人間力(豊かな人間性や社会性、コミュニケーション力、同僚とチームで対応する力、地域や社会の多様な組織等と連携・協働できる力)

3 平成27年中央教育審議会答申

- 教員が備えるべき資質能力については、例えば使命感や責任感、教育的愛情、教科や教職に関する専門的知識、実践的指導力、総合的人間力、コミュニケーション能力等がこれまでの答申等においても繰り返し提言されてきたところである。これら教員として不易の資質能力は引き続き教員に求められる。
- これまで教員として不易とされてきた資質能力に加え、自律的に学ぶ姿勢を持ち、時代の変化や自らのキャリアステージに応じて求められる資質能力を生涯にわたって高めていくことのできる力や、情報を適切に収集し、選択し、活用する能力や知識を有機的に結びつけ構造化する力などが必要である。
- アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善、道徳教育の充実、小学校における外国語教育の早期化・教科化、ICTの活用、発達障害を含む特別な支援を必要とする児童生徒等への対応などの新たな課題に対応できる力量を高めることが必要である。
- 「チーム学校」の考えの下、多様な専門性を持つ人材と効果的に連携・分担し、組織的・協働的に諸課題の解決に取り組む力の醸成が必要である。

4 平成28年中央教育審議会答申

- これからの教員には、学級経営や児童生徒理解等に必要な力に加え、教科等を越えた「カリキュラム・マネジメント」の実現や、「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業改善や教材研究、学習評価の改善・充実などに必要な力等が求められる。
- 教員養成においては、資質・能力を育成していくという新しい学習指導要領等の考え方を十分に踏まえ、教職課程における指導内容や方法の見直しを図ることが必要である。

教育実習の感想

前号でもお知らせしましたが、本年度前期の教育実習が終わりました。学生の皆さんの感想の一部を紹介します。



3週間の教育実習を通して、更に教師になりたいという気持ちが強くなりました。多くの生徒と関わることが本当に楽しかったです。苦しい、辛い気持ちよりも、「今日よりも明日をがんばろう。」と思える日々を過ごすことができました。これから、自分の目標に向かってがんばります。



3週間、毎朝玄関で生徒を迎え、挨拶をしました。挨拶を通して、少しずつ一人一人の生徒のことが分かるようになり、先生方との情報交換にも加わることができました。この3週間で感じた思いや気付きは、何年たっても忘れないようにしたいです。



私は、朝の挨拶運動に参加し、昼休み図書室に行き、放課後は部活動見学をしました。生徒とコミュニケーションをとるためです。次第に生徒から話しかけられるようになり、勉強のこと、部活動のこと、趣味など、楽しく情報交換をしました。実習最終日に、私の絵を描いたメッセージカードをくれた生徒がいて、本当にうれしかったです。



生徒から見えている教師というのは本当にごく一部であり、生徒のためにあらゆる業務を次から次へとこなされていた。生徒の前では一切疲れを見せず、笑顔を見せる姿には衝撃を受けた。これが本物のプロなのだと気付かされた。なぜそんなにがんばれるのかと尋ねると、「生徒からの言葉が原動力である。」と教えていただいた。先生方には、感謝の気持ちでいっぱいである。

教職支援室活用に感謝「延べ137名」

昨年度、教職支援室の来室者数は、「延べ333名」でした。本年度は、コロナウイルス対策のために、来室されずに電話やメールで相談される方も多くなり、7月1日現在で、「延べ137名」の皆さんが、教職支援室を活用されています。

相談者の多くは学生の皆さんですが、中には卒業生や学校現場の先生方もおられます。学習指導や生徒指導をはじめとする、学校現場の問題や課題は、年々深刻さを増しているように感じます。本学を中心としながら、今後も相談者の方々のニーズに応じて、幅広く支援をしていきたいと思えます。



道徳の教科化に思う！（シリーズその38）

平成29年の6月号から、「道徳の教科化に思う」をテーマに、道徳授業の本質的な在り方等について掲載しています。今回は、「教材・手品師の指導資料その1」として、教材の見方・考え方についてまとめました。

本教材については、これまで学習指導案などを掲載したことはありますが、今回は、更に詳しく見方・考え方を述べます。

1 教材名「手品師」

2 出典「教科用図書」

日本文教出版 光村図書 東京書籍 学校図書 教育出版 光文書院
学研教育みらい 廣済堂あかつき

3 対象学年

小学校5・6年生

4 ねらい 内容項目A-（2）「正直、誠実」

自己の利害のために自他を偽ってしまう人間の弱さに触れながら、常に誠実に生活することは自他を大切にしたい生き方であることに気付かせ、心のこもった言動で明るく生活しようとする心情を育てる。

5 教材内容（概略）

腕はいいが、あまり売れない手品師がいた。ある日、しょんぼりとしている少年と出会う。そこで手品師は、少年に様々な手品を見せる。二人は仲良しになり、明日も手品を見せる約束をして別れる。

その日の夜、友人から大劇場への出演の話が聞かされる。少年と約束した日と同じ日であることから、手品師は悩みに悩むが、最後は大劇場への出演を断り、少年との約束を守る。

6 教材の見方・考え方

「手品師」は、長年にわたり、多くの学校で道徳授業に活用されてきた教材である。道徳が教科化されて以降も、すべての教科用図書に採用され実践されている。ストーリーとしては「売れない手品師が、男の子との約束と大劇場への出演のはざまに悩むが、最後には男の子との約束を守る。」であり、児童にとってわかりやすい内容であるが、教師にとっては、高い評価を受けてきた教材であるだけに、分析する力が試される教材でもある。これまでも、多くの授業研究が行われてきたが、解決策を模索したり、男の子との約束が前提で話し合いが進められたりするなど、児童が手品師の本質に向き合うことなく、男の子との約束を守ることに収束していく授業が多く見られた。男の子との約束を守ることが正論であるとわかっているにもかかわらず、大劇場に出演する方に魅力を感じる児童が多くいることも、踏まえていかなければならないところである。

教材分析においては、大劇場への出演をきっぱりと断った手品師の心情、その後少年の前で手品をする心情を、どのように分析するかが大切なポイントとなる。苦しい生活にもかかわらず、一生に一度かもしれない、有名になるチャンスを捨ててしまうことが、その場で判断できるものなのか。利害によって、自分を優先させる人間の弱さの一面にも触れ、悩む手品師に共感させるようにしたい。教師自身も、手品師の立場で思い悩むことが求められ、その先に、手品師の人間としての強さが理解できる。教材の中にある事実（男の子との約束を守った）に、真正面から向き合う授業（考える授業）を望みたい。

展開前段の前半においては、まず、男の子と出会ったときの手品師の気持ちを話し合った後、友人から大劇場への出演の話聞く場面を取り上げる。それは、手品師が男の子との触れ合いの中で抱いた気持ちが、彼の心の葛藤につながるからである。そして、発問「大劇場への出演の話聞いたとき、手品師はどんなことを考えたでしょう。」・「それぞれの考え（①男の子との約束を守る②大劇場へ行く③どちらか迷う）の中には、手品師のどんな気持ちがあるのでしょうか。」を問う。ここでは特に、「②大劇場へ行く」気持ちを取り上げ、「お金ががもうかり、有名にもなれる。友人の気持ちに応えたい。お客さんを喜ばせたい。」などを引き出した上で、「お金がもうかり、有名にもなれる。」に関する発言に注目させ、補助発問「あんなに男の子と約束したのに、それでよいのでしょうか。」、「人には、他の人より自分のことを考えるところがあるのでしょうか。」により、人間としての弱さの一面があることを、教師と児童全員で共有したい。それは、児童の中にある人間の弱さに気付かせることを意図するものである。また、「手品師が自分のことを優先してはいけないのか。」という発言が出た場合は、大いに話合いが深まることが期待できる。また、手品師が友人や客に対して、誠実でありたい気持ちも大切に扱いたい。単に、大劇場へ行くことは不誠実である、という考え方で指導しないようにする。

なお、児童の中から、「約束の場所に置手紙をしておけばよい。」、「男の子を大劇場へいっしょに連れていけばよい。」などの発言があった場合は、教材文ではわからないことを助言した後、手品師のために、様々に思いをめぐらせてくれたことを賞賛するようにする。また、「あなたが手品師だったら、男の子と大劇場のどちらを選びますか。」、「手品師にとってどちらが幸せですか。」などを発問して、話し合うことは避けたい。二者択一をさせることで、「手品師はどうすべきか。」と置き換える児童もいることから、正論を強いることにつながり、自己の生き方についての考えを深める授業にはならない。どちらが正しいかではなく、教材の中にある事実に向き合うこと、児童が自分の考えをもつことが重要である。

展開前段の後半においては、男の子との約束を守り、手品を披露している場面を取り上げる。苦しい生活にもかかわらず、一生に一度かもしれない、有名になるチャンスを捨ててまでも、男の子との約束を守った手品師の心情を、しっかりと捉えさせたい。手品師は、果たして、きっぱりと大劇場への思いを断ち切っていたのかという視点で、教材分析をすることが重要となる。友人にきっぱりと言ったが、後悔の念を断ち切ることができない人間の弱さ、しかし、それを乗り越えようとする人間の強さがあることに気付かせたい場面である。きっぱりと大劇場への思いを断ち切ったと解釈し発問することで、ねらいとする価値にアプローチできるのか疑問である。大劇場への思いを断ち切れない児童も少なくないであろう。発問としては、「大劇場で手品をしている姿を思い浮かべながらも、懸命に男の子の前で手品をしている手品師は、どんな気持ちだったのでしょうか。」であるが、補助発問「手品師を突き動かしたのは、何だったのでしょうか。」や「人はそこまでできるものなのでしょうか。」も併せて投げかけ、ねらいとする価値を把握させたい。